
花鳥風月～花よりも華～

佐保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花鳥風月〜花よりも華〜

【Nコード】

N8012Z

【作者名】

佐保

【あらすじ】

神話と魔法が息づく島国・秋津島。

現代日本に良く似た世界で、魔力・神力に縁のない、できれば一流企業のOLを目指す少女が、16歳の時を境に国の最重要人物に抜擢本人には悲劇で苦勞ですが、周りには十割喜劇。貴人に振り回される彼女の未来はどこに行くやら…。

そんな愉快な日常を楽しんでいただけたら幸いです。

「人生、諦めが肝心だと思っよ」

「諦められるかっ、アンタたちっ、私にこれ以上迷惑かけるとっる

すわよっっ!!...このバカあああ!!...」

私は両親はいないが、下に弟妹合わせて4人抱えてる、ごくごく普通の16歳の女子高生だ。

ある一面においては「普通」というには若干憚られる習い事をしてて、その師匠が後見人になってくれているので、孤児として暮らさなくても済むのが幸いだが、それを除けば本当に普通以上の何者でもない単なる高校生だった。

そう、過去形になってしまつのはどうしてなのか、私が一番知りたいわ……。

「よしっ、柚月、美夜、陽花、夕鶴、起きなさいーっっっ!!!」

息を吸って、ご近所迷惑にならないくらいの大声で、上から順に名前を呼ぶと、まず中学生は14歳コンビの美夜と柚月が起きて来た。

「はよ、雅姉」

「おはよ…雅姉さん。あ、柚月。チビたちいないわよ」

「ホントだ。すぐ、起こしてくる」

Uターンした柚月が隣の部屋を開けると、小学生8歳コンビの陽花と夕鶴を両脇に抱えてやって来る。

「おはよーですう」「」

美夜はその間に、私が洗濯機に放り込んだ洗濯物を干し、夕鶴と陽花はお皿を出したり、箸を出したりする。

私を筆頭に、男女の双子が二組で、これが私の家族だ。

そして賑やかな朝食はきちんと「いただきます！」から。

「今日の夜はハンバーグにしようと思ってるんだけど、ダメな子いる？」

「あれ、雅姉つては遅くなるんじゃないか？」

サラダをつまむ行儀の悪い柚月の手をぺしつと叩く。

お姉ちゃんはしっかりと見てるのよ。

「んー。ほら、私16歳だから、そろそろ『アレ』があるのよ。何準備すればいいのかあまりわかってないから、師匠に聞いておこうと思ってるね。練習せずに帰ってくるから、そんなに遅くはならないつもり」

「ああ、アレね」

「アレかー。姉さん、また一週間もいなくなるのね。寂しいわ」

柚月と美夜がなるほどね、とうんうんと頷きあつと、ちび二人が私のスカートを引っ張る。

「ねーちゃ、どこいくんだ？ゆづ、おいて。ひでーよ」

「そーだ、そーだ。よーかもつれてってよ、ねーちゃ」

「…アンタたちがこのマンションで暮らせるのは誰のおかげかなー？」

私が問いかけると二人がはい、と可愛く手を挙げて答える。
こういうところは可愛いよね、チビたちは。

「みやびねーちゃんのおししょーさまの、ときわさまがこーけんん
をしてくれてるおかげです！」

「くにが「せーかつほごひ」をだしてくれてるおかげです！」

「よくできました。アンタたち、賢いわ！」

よしよしと二人の頭を撫でると、気持ち良さそうに笑うの。

私たち孤児には、国から18歳になるまで手厚い生活保護費が出る。

この国では、子供はもつとも貴重な財産とされているからだ。

マンシヨンは両親の保険でなんとかあったけど、生活費はどうしようもないので…正直ありがたい。

私はことあるごとに、小さい子でもわかるように、ここで暮らせるのは、私の師匠である常盤様が後見人になってくれていること、国が子供である私たちに生活保護費をくれていることを話している。

どちらが欠けても、私達は家族揃っては暮らせなかっただろう。

自分たちは一人ではなく誰かに助けられて生きていることを知ってほしいと思うからだ。

俺は一人でも平気で生きていけるぜつ、なんて未成年で金も稼いだことのないバカで自惚れた人間にはなって欲しくないのだ。

人に対する感謝の心がない人間は、ロクなものにならないだろう…私は愛する弟妹に絶対そんな人間になってほしくなかったから、口を酸っぱくして教え込んでいる。

礼儀と愛想と正しい心があれば、どこでも愛されるだろう。

私は可愛い弟妹に、できればそういう人間になってほしいと思うのだ。

そこに世渡り上手というスキルを持ってくれたら、もう言うことなしだ。

「だから姉ちゃんはお国が仕事しなさいと言えば、しなきゃいけないのよ。世の中、タダでお金もらえるほど、甘くないんだから」

もらう権利もあれば、国民の義務だってあって…その一つが16歳の少年少女を集めた軍事訓練の参加だった。

ちなみに絶対参加なので拒否権はよっぽどを除いてない。

正確にいうと、野外訓練であって銃とかは持たないらしいが、どっちにしても山に籠ることはない。

16歳の次は20歳、そこから10年刻みで60歳まで計6回参加が義務づけられる訓練は、実のところ、皆がすごく楽しみにするものだ。

軍事訓練なのに楽しみつつあたりで間違っているような気がしななくてもないけど、きちんと理由がある。

それに義務をきちんと果たすのは理由がなんであれ、国民としていいことだと思うのよね。

権利を主張するなら、義務だって果たさなきゃ割りにあわないわ！

「あ、おねーちゃん。あきつしまこうだ！」

テレビの画面の奥では、ヴェールで顔はわからないが美しい笑みを浮かべた女性が、どこかの民に手をお振りになっている。

これが私たちの国主である秋津島公爵殿下。

この国、秋津島国にただ一人しかいない公爵位を持つ尊き存在が彼女であり、秋津島国の首都である皇都生まれの私は、その軍事訓練で秋津島公の祝辞と祝福を受け取ることができる。

ミーハー丸出しで申し訳ないけど、有名人は見てみたいじゃない。その心理だ。

そしてほぼ10割、軍事訓練に参加する人間は…公を見たくて参加するといわれている。

私も楽しみだから、気持ちはすごくわかる。

他の領地生まれなら、四候とか守護候とかく四神とか言われる、四人しか持たない候爵位を持つ東西南北の大諸侯の挨拶が見られるらしく、それはそれで見てみたい気がする。

噂によると、どの方もそれは見目麗しい方々らしいので。

「ねーちゃ。どーして、あきつしまこうはドレスもスーツもきれいなむらさきなの？」

そろそろファッションに興味があるらしいおませな陽花の言葉に、私が苦笑する。

「秋津島公の色だからよ。法律で定められているから、公爵以外は着ちゃダメなのよ。禁色っていうんだけどね」

「じゃ、じゃあ、よーかはみかちゃんのおたんじょうびにも、むらさきのドレスだめ？」

ガーン、とショックを受けた陽花に、慌てて私が言い添える。

落ち込むと陽花は後を引くのだ。どんよりキノコを生産しそうだから、それは鬱陶しい。

「それはいいのよ。着ちゃダメなのは、入学式とか卒業式とか、国の行事の時とかね。プライベートは構わないのよ。美夜が紫のスカート持つてるの、知ってるでしょ？」

「うんつ。みやねーちゃ、おしやれできれー！」

「まあ、陽花。なんてアンタは正直なの！今日は陽花の好きなホットケーキ焼いてあげるからね」

「やたつ！！はちみつ、たあつつぷりね！！」

うん、陽花。アンタもちやつかりしてるよ。しっかりしてるわー。家族のほのぼのしたスキンシップと会話を他所に、どこかの領主と会談している公を見る。

凜としていて、立ち居振る舞いも見事だわ、ホント。

この国にはいくつか禁色が存在していて、貴人以外が着れない色がいくつもある。

その最たるものが秋津島公の紫であり、特に今代の秋津島公は紫の中でも確か「藤色」を禁色とされたので、その色は徽章以外には使ってはならないルールになっている。

公式の場でうっかり使ったら、多分…社会的に抹殺レベルの冷や

やかさで見られるだろう。礼儀って怖いんだから。

勿論、公の紋章も「藤」だ。…下がり藤だったか、上がり藤だったかは忘れてしまったけど、まちがいなくそう。

(…っていつか、あの色ってはっきり言って人を選ぶから、普通の人間には無理だと思うけどな…)

着るといわれたところで着たくない色だ、まず似合わないもの…
絶対。

「…………ごちそうさまでした!」「…………」

もちろん、食事のしめくりはきちんと手をあわせて。

朝食は一日の基本だから、しっかり食べさせるし、好き嫌いなんて絶対に言わせないのだ。

手早く柚月が茶碗を洗って片付ける間、ちびたちはランドセルに入った教科書を確認し、美夜がチェックを入れていく。

「夕鶴、音楽の教科書ないわよ。陽花、今日算数じゃなくて社会でしよ」

「あ、リコーダーもだ。とってくるー」

「しゃかいのきょーかしよ、どこー? みやねーちゃ、かくした?」

「そんなわけないでしょ、早く探しておいで」

いつもの光景を横目に、窓に鍵をかけて、ガスの元栓も確認する。

そして準備の終わった全員が玄関に揃うと、一番出かけるのが遅

「桐生雅、参りました」

市街地の南にある高地に建てられた小さな建物は、女子しか習うことの出来ない「紅花流」の本拠地だ。

秋津島国のいたるところに看板掲げているから…まず知らない人間はいないだろう紅花流は、武道と礼儀作法の私塾だ。

基本的には武道なら体術から剣術までなんでも学ぶことができるし、ある程度のレベル以上なら馬術なども学べるのがウリ。

初級から中級までなら、皇都内に支部が幾らでもあるんだけど、私は師範代の免許を持っているので、他の師範代の人々と共にここで学んでいた。

力で男に劣ることが悔しかったらしい何十代か前の朱雀候が、弱い女性でも男に負けないような技を編み出ささいと…ある意味ではすごく難題な命令を下したことがきっかけとなって生まれたもので、護身術から始まって、師範代クラスになると宮廷作法なども学ぶことになる。

女性の護衛は女性の方がいいので、直々に声がかかることもあるらしいが…私みたいな子供に声がかかるはずもないので、今のところまったく役に立っていない。

まあ、ただで学べる礼儀作法と思えば、ガンガン頑張るけど。

だってね、礼儀作法に通じています、でひょっとしたらいいところに職見つけられるかも知れないし！

ちなみに普通の礼儀作法もきちんと教えてくれるから、ある程度になった女の子たちは、行儀見習いレベルで、いたるところにある支部に通わされる…というか、親が放り込む。

うちは美夜も習ってるし、陽花も今年から放り込んだ。

マナーくらいは学んでおいて損はないし、私の妹たちということでは授業費ゼロなのありがたい。

授業費がゼロならばしつかり元取って何かに役立ててやるわと意気込む美夜と、マナーはレディの第一歩と言いくるめられて喜んで通う陽花に、筋がいいと支部長のお褒めの言葉をいただいたこともしばしば。

中級免状まで持っている、と、礼儀作法上は完璧な淑女とみなされるので、大抵の花嫁さんはこの免状を持って嫁ぐんだそう。美夜と陽花の目標もここだ。

ただ、どっちも私を知っているからには上級免状は取らないだろうなあ……。実技試験だし…。

紅花流を愛しているお姉ちゃんはちょっと寂しい…。無理強いはしないけど。

「いらっしやい、雅。こちらにおいでなさい」

チン、と涼しい音をさせて生け花を切っていた師匠が微笑んで、招いてくれる。

紅花流の頂点に立つ総帥である師匠は、見た目はたおやかな老貴婦人で、立ち居振る舞いも美しい私の憧れだ。

今もこれだけ美しいなら、昔はそれはすごかっただろう…きっと秋津島美人の代表だったに違いない。

「失礼します」

音をさせずに障子を開けて中に入り、障子を閉める。

そして師匠にたいして五点礼をすると、良く出来ましたと師匠がにっこり笑ってくれる。

私は師匠のその笑顔がとても好きなのだ。

褒めてもらいたくて、それはもうガンガンに頑張った過去の記憶が懐かしい…まあ、師範以上になれば、国に貢献できる人材という判子押されて、生活費が上乘せされるという事情も大きかったけどね。

ええ、大きな声では言えないけど、師範の免状取った次の月から生活費が1.5倍になったんだよ。すごすぎる！

「あれ、里香さんは？」

いつも師匠の傍に控えている懐刀の里香さんが見当たらない。

「ああ、里香なら、伯爵家の要請があったので護衛に出しましたの。私が行きたかったのにー」

拗ね拗ね、と唇を尖らせながら拗ねる初老の女性がこんなにかわいいなんてあり得ない！師匠、その可愛らしさは反則です！！

「伯爵だと華族ですよ。花族ならともかく、華族ってすごいなー」

この国は基本的に、庶民とは別に…花族とその上位である華族の二つの身分が存在する。

公爵である秋津島公は別として、候爵と伯爵が華族。

このクラスは基本的に国政をメインに動く人々であり、地方の領地を治めるのは花族と呼ばれる男爵（女爵）、子爵。

二つまとめて、花冠とも言う。

私からすれば「偉くて遠い世界の人」のカテゴリで一括りなのだが、あまたの貴賤を見てきた師匠に言わせると違うらしい。

「伯爵クラスだったら宮廷にも参内するでしょう？ちょっと宮廷の噂話も仕入れないとね」

たかが噂話、されど噂話。

やんごとなき人々の噂は単なる噂でとどまらない時があるらしく、それに紅花流が巻き込まれてはならないと師匠は考えているようだ。

やはり総帥たるもの、思慮深くなきゃいけないんだろうな…大変だ。

「……まあ、間違いなく巻き込まれるとは思っただけ……未だ茜の花も見つかっていないことだし…」

ぼそつと呟いた師匠の言葉に、私が「？」マークをつける。

茜？

「…茜つて、染料の茜ですか？」

私の疑問に、いいえと師匠が苦笑に似た笑みを浮かべる。

「秋津島公の剣のお名前なのよ、茜というのは。代々、秋津島公は自らの剣をお持ちなのだけれど、まだ現れてなくて…ですから今代の公は剣をお持ちでないの」

「…現れるんですか？剣が？」

「そう。ある日、突然現れるの。茜は本当に特別だから……。ところで水菓子が食べたいの。お茶を一服いかが？」

「喜んでいただきます」

紅花流と茜の剣と何の関係があるのかさっぱりわからなかったけど、師匠の濃茶は大好きなので、喜んで茶室に向かう。

今日のおやつはどこだろう？

菊やの花菓子、みむろの最中もいいな。

ちびたちに少しでも多く食べさせてあげたいから、いつもおやつを我慢してる身としてはここで甘いものを食べられることがありがたい。

昔は子供だったから、作法も知らずに手づかみでいっぱい頬張った記憶が懐かしい…今でも笑われるんだもん。

いや、今でも子供だけだね。

そして師匠の素晴らしい作法に見ほれた茶会で、結局「いつものように野生の木の実や薬草のことさえ忘れなければ大丈夫よ」と太鼓判押されて、私は家路についた。

ええ、ここではそういうのもすっかり叩き込まれるので、私キノコの判別も得意です。

あまり日常で役に立った記憶はないけどね。

賽は投げられた 01

そしてやってきた皇都の中央ドームは人、ヒト、ひと。
ともかく、老若男女、人でいっぱい。

こんな人を見たことなく、くらくると眩暈がしそう。

一番最初に入場した人は一週間前から陣取りしてたそうで……それには流石についていけないわ。人の情熱って時にはいろいろなもの蹴散らすものよね……うん。

しかし、意外に16歳の子って多いんだなって思ったら、実は申請が通れば、17歳だろうと15歳だろうと、参加してもいいんだって聞いてビックリ。

それで毎年参加するつわものも結構いるとか……しかも召集された以外の人は実費なのに！私は絶対無理だ。

そんなお金があれば、私は迷うことなくチビたちの学費と給食費にするわよ！

「うらやましいです……実費で参加できるなんて……」

横で親切に教えてくれる、20歳前後のそれは素晴らしい美人で
ナイスな体型のお姉さまが頷く。

光に透けるとキラキラ輝く金茶色の髪は、海を越えたお隣の英香
国の血が入ったんだらうか。この国の黒髪の中では珍しい。

「一般の人は20歳からは10年おきだけど、花冠は最低5年おき
に参加しなきゃいけないの。それが「高貴なる義務」だから」

紅薔薇花音と名乗ったくるくるの巻き髪が似合うゴージャス美人

が、面倒くさそうなため息を吐く。

(花の名前がついているから、花冠だろうとは思ってたけど…)

この国の花冠は<花>の名前が家名につき、勿論紋章も花をかたどったもので、それはこの国の女神の神話に關係するものだ。

しかし身近で見たのは初めてで、しかもすごい美人さんなのでビックリだ。

ご本人は親しみやすい人柄なので、花冠の印象は180度変わったけど…。

「5年ごとに山籠りか…大変ですね…」

「ホントよねー。遊んでるように見えるけど、花冠はみーんな義務がいっぱいなよ。でも、この訓練は遊びの範疇だけだね。炊飯で炊くご飯は楽しみだわ」

私、野外訓練って好きなの、と嬉しそうに言い切る花音さんは、やっぱりなんか違う気がする。

「ホント、ご飯は美味しゅうございますものね」

後ろからうふふ、と淑やかに現れた秋津島美人に、うおつとたじろぐ。

花音さんが英香国の血が混じった西洋美人なら、この人は生粋の秋津島美人代表だ。

腰まであるぬばたまのような黒髪はどこまでもまっすぐなさらさらストレートで、立ち居振る舞いも美人の見本のような淑やかさ。

二人揃うと眼福だわー。

西洋と東洋の美人代表！みたいな感じで、本当に絵になるの。

たとえジャージであろうと、まったく損なわれない美人っぷりは素晴らしいわ！

「竜胆詩織と申しますの、お名前を伺っても？」

「桐生雅です。えと、竜胆さんも…花冠？」

「うふふ。竜胆家ですもの。でも詩織とお呼びになつて。雅さんと呼びせていただきますから。私もご飯が楽しみです。焼きおにぎりを作るつもりですわ」

「ああ、あれ香ばしいわよね。私も作ろうかしら、なかなか食べられないし」

「ですわよね。私、とても楽しみですのよ」

どこかにじいやとばあやがいても私は驚かないぞ、この二人ならうふふ、おほほと笑う様が似合いますぎていて、「ああ、この人たち高貴な人なんだー」と思わせる何かがある。

まあ、そんな人たちにもきちんと義務が発動されているようで何よりだ。

権力つてのは上から腐るってよく聞く話だし。

賽は投げられた 02

三人でたわいもない話に興じていると（詩織さんと花音さんのせいで、私の周りはエアポケット状態だったので逃げることできませんでした…ええ）、子供を抱いた男の人が近づいてくる。

40代後半くらいかな…渋い雰囲気のナイスなミドルグレイ!! 私の好みにジャストなおじさまに、ちよつとクラツとする。

やはりね、男は年を得てナンボだよ!というと、美夜と袖月にはいつも白い目で見られておしまいなのが切ない。

でも、美夜の好きな男性アイドルたちって若すぎて、弟みたいなものだからきゃーきゃーミーハーな気持ちにはなれないのよね。

しかも、ロマンスグレイに抱っこされた子供は夕鶴と陽花より少し年上だろうか…またなんて愛らしいのか。

（男の子…だよねえ?かーわいい）

ミドルグレイの息子さんなら、きつと奥様も美人に違いない。でもちよつと年の離れた若い美人希望です…なんとなく。

「詩織嬢、花音嬢。ここにいたんですか」

「お姉様方、急にいなくなるから探しました」

どうやら二人の知り合いらしい…つまり花冠か、この人たちも。花冠って顔のいい人しかいないのか、うらやましいわ。

「ああ、お友達になりましたの、こちら桐生雅さん。おじさまも雪

も、名前で呼んで差し上げてくださいな」

詩織さんの捌けた言い方に、二人が私をじーっ、と見ると、すぐにつっこり笑う。

笑うと、またすぐいい感じだわ、二人とも。

「はじめまして、雅お姉様。白椿雪博と申します。僕もぜひ名前で呼んでください。よろしくお願いします」

「ごきげんよう、雅嬢。私は立葵宗徳と申します。よしなに。私は可愛い娘さんには「おじさま」と呼ばれたいな」

「桐生雅です。よろしくお願いします」

ぺっこりと頭を下げる。

そうか、雪博くんとおじさま…（なんか呼びなれなくて恥ずかしい）は親子ではないのか。

しかも、やはりとってもフレンドリーだ。

「……………ん？」

あれ、ちょっと待て。

竜胆の花は青、紅薔薇は当然赤、白椿は白、立葵って黒じゃなかったっけ？

「あの…皆様、皇都花冠ですか？」

花冠の姓である花の色は、基本的にそのまま領地に直結する。

東方・青龍領の青、南方・朱雀領の赤、西方・白虎領の白、北方・玄武領の黒。

これらの色が鮮やかな花は基本的に、その領地の人間である可能性が高いのだ。

まあ、そうでない花冠たちもいるけれど。

「いいえ、私たちは東西南北の諸侯ですわ。でも用事ついでにここに受けますのよ。花冠はどこで訓練してもいいことになっていますから」

詩織さんの、さも当たり前と言いたげな言葉に感動した。

「そうですね。いろいろな仕事があつて、でも他所にいたら大変ですものね」

崇高な義務を果たす花冠というイメージを持ちかけた私に、花音さんの追い討ち。

「それに、秋津島公を見れるチャンスは逃す手はなくてよ！」

うんうん、と全員が頷く。

おんやー？私のイメージが崩れていくのは気のせい？

「……皆様も10割の一人なんですな……」

そうか、花冠もミーハーなのは変わらないんだわ…すごいぞ、秋津島公。

賽は投げられた 03

シャラン、シャランと水晶琴の音が聞こえると、お喋りしていた皆の音がぴたりと止み、一斉にみんなの視線がはるか遠くにある壇上に向かう。

（軍人が水晶琴持つんだ…。あれ、ひよっとして軍属の神官かも）

目深に被った帽子と制服は軍人の深紅だけど、たすきのような綴は純白で、しかも水晶琴を鳴らせる人間は基本的に神官だと聞いたことがあるから、めったにいない軍人で神官という、器用な二束のわらし履いた人かも知れない。

神官は、文字通り神殿で働く人で、建前は女神に仕えていることになっているけど、最高位は確か秋津島公だったはず。

神力と呼ばれる治療力を駆使して、軽い怪我とかなら即座に治すことができるので、どちらかといえば町の便利屋さんに近いかも。ただ、そういう性質の力を持つということは、人柄も温和で優しい人が多いので、どちらかといえば暴力に属する軍人とは相容れない。

それにものすごく神官は数が少なく、万が一神力があると認められたら、即座にスカウトが来ると聞いたことがある。

耳に挟んだお給料がすごく良かったのよね…試しに師匠のお知り合いの偉い神官様…しかも位は上から二番目の枢機卿下だ！…に見てもらったけど、残念なことに私には神力はなかったらしい。

その後、二人で長い間こそこそ話しこんでいて、何故か師匠が「

おーほっほっほ、雅は渡すものですか！この子は紅花流のものよ！
と高笑いしていた…何故だろう？

神官様の「おーのーれー、このアマ！！」といわんばかりのプル
プル震えた怒りの態度が怖すぎて、聞けなかった…いや、ホントに
怖すぎて。

全人口の0.01%しか持っていない神力も日々の訓練で増幅す
るものらしく、結局は何するにしても訓練がものを言うのだと感心
した記憶がある。

ちなみにその枢機卿猥下が、万が一師匠に何かあった場合は私の
後見人に指定されている…師匠に押し付けられたんだらうな、気の
毒すぎる。幼馴染とはいえ…。

ともあれ、半年に一度は顔見世兼ねて神官様のところに通うと、い
つも嬉しそうに出迎えてくれるのが申し訳ない。

おやつにつられてるなんて、死んでも言えない…美味しすぎる
からだなんて。

でもそれを除いても、神官の色々な話を教わるのはとても面白く、
水晶琴の話も聴いたことがあったのだ。

ちなみに琴といっているけど、見た目は男の人の背よりも高い長
さの優美な杖で素材はそのまま水晶。

持ち手や金具は金で固定してあるけど、貴金属や水晶は神力と相
性がいいらしく、基本的に神官の持ち物は、ものすごく細工が優美
で…こつこつのもなんだけど、高価なものだ。

勿論、水晶琴も例に漏れず…てっぺんには七色に輝く正円の握り
こぶし大の宝石がはめこんであって、その周りを大きさ違いの環が

くるくる水平に回っている。

その水晶の環同士がぶつかる時に鳴るんだけど、それが琴の音みたいだってことで水晶琴と言われている。

しかし、そもそもこれは一般人が持ったところで鳴らないどころか、環が浮かない。

一度触らせてもらったけど、うんともすんとも言わなかった。

神力を手順を踏んでこめないと、動かないのだそうだ。

つまり、第一段階の「神力をこめる」という時点でアウト。今の神官さんみたいに持った瞬間は水晶琴がキラキラ輝いたんだけど、すぐに消えたのでガツカリした思い出がある。

あのキラキラをずっと維持できてこそ、神官の極意なのだ。

懐かしいな〜と見ていると、水晶琴の音が大きくなり、最後にシヤンツ、と大きな音を鳴らし、彼が口を開く。

「女神が愛し慈しみ、今も守りたもう秋津島における、<皇すめ>の代理人たる秋津島公爵殿下のご入来。みなのもの、心して拝聴せよ！」

マイクも使っていないのに、すごい音量！私、ドームの後ろの方にいるのにしっかりと聞こえるよ。

賽は投げられた 04

そして、とうとう壇上に藤色のドレスを着た秋津島公が現れる。

顔を覆うヴェールまで藤色なんて凝ってるなあ……と思つてると、真紅のルージュを引いた美しい唇が微笑んだ。

ヴェールの中身は見れないけど、秋津島公は絶対に美人だと思うの！

『我らが女神の恩寵を受けし花よ。国統べる<皇>の愛しい花よ。妾…秋津島公爵は女神と<皇>の名において、そなたたちを祝福する』

<皇>というのは、女神の息子とされていて、世界を支える存在といわれている方だ。

ヒエラルキーは女神 <皇> 秋津島公、となるみたいだけど、女神様は神様だし、<皇>も息子つてことは神様だろうから、どんなに遠くても存在がある秋津島公が一番偉いんじゃない？と巷では思われている。

『さあ、妾が祝福を受けられよ、ここに集つた勇敢な花たち』

麗しい仕草で公がいつも持っているダイヤのついた錫を振ると、私たちの頭にキラキラと光る祝福の祈りが降り注いだ。

日曜日に向かう神殿で受ける祝福と同じ、しかしそれよりも遙かに大きな祝福の祈り。

伊達に神官たちを束ねてはいないと初めて知る、公爵の神力。

魔法…花冠の適性である魔力を持つ人間が使えるもので、秋津島公は直接私たちの魂に語りかけながら、神力も使えるなんて、本当に秋津島公は特別なんだと思ひ知る。

この国を統べる、わが国で最もかけがえのない御方。

そして指を組んで目を閉じ、女神の恩寵と秋津島公の祝福を受け取る。

噂に聞いたとおり、キラキラ光るものに触れると、なんだか暖かく優しい気持ち満ちた。

もういない母親に抱きしめられているような、そんな優しさは…
ついつつかりすると涙が出そうになる。

『さて、集いし妾の愛しい花よ。そなたたちは一週間とはいえ、この訓練にて普段の生活では得られない叡智を身につけよう。妾は秋津島の花たるそなたたちが、その知恵を隣人に対する優しさで使うことを願ってやまん。そして願わくば、そなたたち花がこの訓練で得た知識を生かすような危険に陥らんこと、妾は心より願うておるぞ』

頭の中に響く玲瓏とした声は、天上の音色のごとく皆の心に響き渡る。

遠く、近く…まるでさざなみのよう声は、幻想的に美しく。

公の声は、まるで子守唄のようでいて、どこか懐かしい。

魔力で増幅された声つてのは、皆こうなのかな…綺麗でやさしくて、力強い。

数万人がいるというのに、しわぶき一つないドームは、秋津島公

の声を聞き逃さないようにと皆が必死だ。

『そして妾が花よ、そなたたちは三人で組むことになるうが、どの組も縁深き者たちなり。一週間、力を合わせ、困難に立ち向かい、その困難を克服せんことを祈る』

軍事訓練は、くじ引きで選ばれた三人一組で一週間を共に過ごすというもので、最初はくじ引きと聞いて…役人たちのいい加減っぷりに眩暈がしたが、聞けば秋津島公直々に魔力をこめて、自分の縁に一番つながる人間同士がくつつくようにしてあるんだって。

だから事前にもらった残り二人の名前の人とは、縁があるということだ。

ただし念は押された。「けっして相性がいいってことじゃないからね」と。

いくら縁が深いからって、仲良しになれるとは限らないらしいので…そこは上手くやってねということらしい。

やっぱりいい加減かも……。

『さあ、女神に祈ろう。そなたたちが怪我なく一週間を乗り切ることを』

秋津島公に促され女神に祈りを捧げている間に、彼女が壇上から降りて見えなくなる。

そして私は詰めていた息を吐いた。

思っていたより、すごかった…なんていうか、迫力あるっていうか。

ちょっとだけ、ヴェールで顔が隠れるなら影武者もいたりしてね

「、なんて思っでごめんなさい！無理っ、普通の人間には影武者務まらないって。あの存在感、出せないから！」

「ふふ、初めての秋津島公の祝福を受けた感想は？」

「迫力です！すごすぎ…手に汗掻いちゃいました。あれですよね、絶対に勝てない存在があるとしたら、公がそういうものだと思います。戦う前からもう未来はわかってるよ！的な」

花音さんの問いかけに私が答えると、皆が模範解答を外されたような変な顔をしていた。

ん？なんか間違ったかしら？

「普通そこで強い、という言葉はあまり出ないので…。大抵、公の容姿や声のことで」

おじさまが苦笑して笑うと、皆もうんうんと頷く。

容姿はすごく美人、声はすごく綺麗…こんなこと、当たり前すぎて感想にもならないと思うんですけど……???

「でも、雅さんのそういうところは好ましいですわね」

「そうね、可愛いわ、雅」

「とても得がたい資質だと思います」

うんうん、と皆が何故か納得しているんだけど、まったくわからない。

ふと気づくと、前の列のほうがざわつき出した。

「ああ、そろそろ組分けですか。どなたと組むか楽しみですね。私

はこれが大好きでね。違う思考、違う環境ゆえの感覚。会話するととても新鮮です。自分では得られないものですから」

楽しそうに笑うおじさまに、この人はものすごい柔軟な思考を持っているんだろなあと思った。普通、そんなこと思わないから。むしろ不安たっぷりだよ…どんな人と一緒に組むのかわからないし。

「学ぶこともたくさんあります。僕は特に幼いから、もっともっと色々な人から学ばねばなりません。こういう風に見知らぬ方と組む一週間は僕を成長させてくれます。ありがたいことです」
すごい、優等生の台詞だ。

「雪博くん、いくつ?」

「今年10歳になりました」

「弟や妹と2つしか変わらないのに………すごいわ、雪博くん!」

ああ、あの甘えん坊たちにこの台詞聞かせてやりたい。
でも、環境かも…花冠は責任があるし。

「雅さんは今回どなたと組んでいらっしやいました? 組めるものなら、私も雅さんと一緒にしとつございますのに、お相手が羨ましいことですわ」

「ホント。一緒に遊びたくてよ」

なんか、すごく嬉しいな。

社交辞令でも、こんなこと言われて嬉しくない人間はいないよ。
遊びたい、はきれいにスルーするけど。

「えーとですね…多分知らないと思うんですけど、香月藤緒って人

「む、無効ですわっ。こんなのずるいですわ。ひどうございますっ」

ええっ、ちょっと詩織さん、どうしたんですか?!

「ずるいわよっ、ひどい!! 私たちだって雅さんとご一緒したいのにつ!!」

ずるいずるい、と花音さんがぶくつとほつぺた膨らませてぶんぶん拗ねるんだけど、すごく可愛い!!

「しかしお姉様方。くじは公平ですから…もうこれは雅お姉様の引きがいいというか、悪いというしか……」

えっ、ちょっと!! いいの? 悪いの? どっち!!

「……秋津島公が仰った通り。お二人と縁が深いのでしょうか……それは注連縄のように」

「なんで、注連縄なんですかつ、おじさま!!」

とうとう突っ込んでしまった私に、皆が複雑な視線を向ける。

いろいろ感情が入り混じって読めないくらいに複雑っぱい…なんで!!?

「やーだーなー。四人とも勢ぞろいして。私にも紹介してよ、可愛いお嬢さんを」

ひょいと現れたのは、見たことのないくらいの美少年。

花音さんとも違う亜麻色の髪。

これは、絶対に美夜がきゃーっつ、と黄色い悲鳴をあげるはずだ。ビックリするくらい的美少年だもん！

サイドだけが長いショートカットのすらつと背の高い美少年に、四人がうやうやしく頭を下げる。

「ごきげんよう、藤緒様。麗しの御方」

「ごきげんよう、朱の姫君。貴方はそのような姿でも美しい。蒼の姫御前も麗しく」

「ご機嫌麗しゅう、藤緒様。本日も凜々しゅうございますな」

「ごきげんよう、黒の宮。おじさままで失礼だよ」

「ごきげんよう、藤緒姫。私も若くいたので、噂話は楽しゅうございますよ」

「そしてご苦労様、白の若君。君まで連れてこられて難儀だったね」

「ご機嫌よろしゅう、藤緒お姉様。いいえ、僕が頼んだのです。せつかくのチャンスは逃したくありませんから」

うわー上流階級の挨拶だ、すごい。

しかもこの美少年、女の子なのねっ。全然、見えないけど…！

「よろしく、桐生雅さん。私は香月藤緒」

「俺が斎孝弘だ、よろしくな」

いきなり私の後ろからぬって現れた男の子にビックリしてしまう。け、気配感じなかったぞっっ！！

そして斎くんには、さらに4人が深く頭を下げる。

香月さんが美少年とするなら、斎さんはなんだろう…野生の獅子みたいな感じ。

顔のパーツとかうんぬんより、存在感で判別させるような……そんな圧倒的な何かを持つてる気がする。

よく見ると、野生的なハンサムなだけ……本当に存在感が半端ないから、容姿はあまり関係ないと思わせる何かがあるのよ、うん。

「よろしくな、桐生雅さん。……ついても、俺堅苦しいの無理だから、名前で呼ばせてもらう。俺も名前で呼んでくれ」

「孝弘、くん？さん？」

「私たち、同い年だよ。だから私も藤緒でよろしく。呼び捨てがいいな、注連縄の運命共同体だし」

「えーと、つまり藤緒、で孝弘くん？わかった。私も雅でいいよ」

なんか、この二人……なんていうのか、秋津島公に感じた「強さ」をひしひし感じるなあ……強そう。

んでもって、きっと偉いんだろうな。

花族ではなく、華族かも。

しかし、私が花冠に関わるわけないし……んー縁遠い人だと思うんだけどなあ。

「さあ、楽しい一週間にしようね、雅。いやあ、楽しみだなあ」

ぐっふっふ、と笑う藤緒に、私が冷ややかな目を向ける。

「……親父くさいわよ、藤緒。見た目美少年なのに台無し」

私の突っ込みに、おじさまと孝弘くんが爆笑して、藤緒がいじけた。

もちろん、私はフォローしなかった。

まずは場所を選んで、テントを張る。

迷わないように木に数字がマーキングされてるけど、そんなのは何かあったら役に立たないので、目印に頼らない位置情報も得て、次に男手もあるので窯作り。

レンガが置いてあるあたりで、私の中では訓練からキャンプに格下げだ。ありえないから、普通は絶対！！

この手に慣れている私はともかく、華族の義務をしっかり果たしているらしい藤緒と孝弘くんもてきぱき、薪を拾ってきたり、火をおこしてくれたりで能率がいい。

きちんとマニュアルもらってるんだけど、本当に初心者向きなので…私は自己流で通させていただきます。

藤緒も孝弘くんももらったまま見ていないのが丸判りな辺り、何度も義務を果たしに来ているんだろうと思う。

「あ、孝弘くん。そのキノコはダメ。食べたら幻覚起こすよ」

「そうなのか？見た目は綺麗な赤色なのにな…」

「……基本、綺麗な色のキノコは毒キノコだから…山菜は私が摘んでくるよ。ご飯お願いね」

すごいぞ、孝弘くん。君の採ってきたキノコ、100%毒キノコだ！！数十個とってきて、すべてが毒草って…ある意味すごくない？私は初日から死にたくはない…当たり前だけど。

ホント、師匠の言うとおり、この知識が役に立つ日が来るとは…何でも学んでおくべきだよ。

「藤緒、勿体無いから固形燃料ばんぼん入れないほうがいいよ。いつでももらえると限らないしね。余ったら次回に使えるんだから、節約しないと」

「おおつ、節約！素敵な響きだよね。わかった、ケチるよ！」

なんか違う。ものすごく違う。

浮世離れしてる、あの4人以上に……っていうか、あの人たちも大丈夫なんだろうか。周りが苦労しそうな気がするんだけど……。

うん、不思議とあの人たちが苦労するなんて、これっぽっちも思っ
てません。苦労するなら絶対に周囲に決まってる。

ひよいひよい、とちよつと高い木に登って木の実を取ったり、キノコや山菜を摘むと、焼き魚の香ばしい匂いがする。

戻ると、焚き火には焼き魚が作られていた。美味しそう。

「見て見て〜魚釣ったよ！」

「すごいっ、藤緒が釣ったの？」

「ううん、孝弘。すごいでしょ」

「うん、すごい、すごい！」

魚釣るの大変なんだよねー。

配給されたチーズをパンに乗せて火で炙ると、それだけで贅沢な一品になる。

魚には塩だけ。しかしこれがまた美味しいの……！！

「しかし軍事訓練といっても、軍人さん来ないね。何教えてくれるか楽しみにしてたのに」

私としては、ナイフの効果的な使い方とか、サバイバル知識の上

級編とか教えてもらえると嬉しいのになーというと、二人が笑顔のまま固まる。

「え、そんなこと考えてたの？」

「だって軍人って職業でしょ？ サバイバルに長けてるでしょ？ 私、刃物の扱いがちょっと弱いよね。包丁もあまり上手く使えないし。野うさぎの上手な取り方とか、蛇の美味しい食べ方とかは知りたいわ」

孝弘くんがぼろっ、と口から魚を落とすけど、本当のサバイバルしてると、絶対に思っただってば！！

「……雅、お前すげーよ。なんでそんなこと知ってたんだ？」

「それは私が紅花流の師範代だから。師範以上になると、山でサバイバル訓練をやらされるのよ。運悪く熊とバトルなら、何が何でも勝て！ が合言葉だもん」

二人の顔色がさつと青くなるけど、別に脅してるわけじゃなくてホントなんだってば。

「…雅、熊と当たったことは…？」

「あー、二度だけ。でもあつちはおなかいっぱいだったから見逃してもらえたの。無益に戦いたいわけないわよ。うち、弟妹4人いるんだから怪我なんてしたら医療費がかって大変なもの」

医療費、バカにならないんだから。特に私が怪我したら、申請とかいろいろ大変になるし！

「……紅花流つてすげーな…普通の武道だと思ってたぜ…」
「よく護衛に紅花流の人見るけど、熊と戦う女傑だとは知らなかったわ……」

遠い目をした二人に、しまった！評判に関わるっ、と急いでメリツトを話すことにする。

紅花流が野蛮な人間だと思われては困るっ。

私はこれだけど、他の方は立派な淑女なんだからっ…熊とは戦うけど…。

「え、でもいいこともあるよ！野草とか薬草とか植物にすごく詳しくなるのよ。それに師範代になるとね、宮廷作法とかも教えてもらえるの！就職のときにちよつとは役立つかも知れないよね。普通の社員になるのは確実だけど、でもそういう知識あればどっかの取引先で有利になるかも知れないし」

「……宮廷作法って大変じゃね？俺、未だによくわからん」

「大変だよー。作法一つといえど、手ばかりできないし。宮廷の作法って独特だから」

ええ、大変ですとも！

秋津島公に対する拜謁法まで教わったよ、そんな目の前で見る日なんて絶対に来ないってわかってるくせに。

「本当は花臣になりたいんだよね。お給料いいでしょ。でも取りえってこれだけだしさ」

国に雇われるんじゃないやなくて、花族本人から雇われる人間を花臣と

いう。華族に雇われる人は華臣。

どっちにしても、花冠個人が雇うってことはそれなりの人物ということで、当然棒給が半端なくいいらしい。

高位花冠である華族に雇われるなら、もったいいだらうけど、そこまで夢想は出来ないし、そんな実力もないので、ギリギリ見れる夢で花臣になりたい、が野望だ。

それでも一般人からしたら、ものすごいことなんだし。

「私が雇ってあげようか？」

「ありがとう。でもね、藤緒。能力もわかんない人間を口約束でも、期待持たせちゃダメだよ。お金を払うに見合う人間雇わないと、絶対に損するんだからね。そんなのに給料払って、後悔するのはそっちよ」

「道理だが、シビアだな、雅」

孝弘くんが苦笑して火に枯枝を放り込むと、パチリと火が爆ぜる。

「私の考えだから押し付けはしないけど、お金をもらってことは、それだけに見合う働きをしなきゃいけないのよ。私は対価に見合う人間であるか、そこは重要な問題だと思う。それは桐生雅という私本人の価値だと思うの」

私の偉そうな言葉に藤緒が目を丸くすると、嬉しそうに破顔する。うわー、すごいぞ。美少年の笑顔の威力って抜群だ。ちょっとときめいた。

「…本当に欲しくなったな、私のところに」

「藤緒がお金惜しくないと思ったら、私を雇ってちょうだい」

でもよ、と孝弘くんが口を挟む。

「俺、よく知らないけど、お前くらいの年で師範代って普通なのかな？」

「…うーうん。私が最年少って言われた。そりゃがんばったもの。知ってる！？師範以上になると、国から補助金が上乘せされるのよ！」

ぐぐぐっ、とこぶしを握り締める。

「なるほど」

すごく納得したとばかりに二人が頷く。

「食べ盛りが二人、そしてもうすぐ食べ盛り予備軍が二人いるのよ。おなかいっぱい食べさせてあげたいもの。そのためなら、がんばるわよ」

「兄弟多いと大変だな。俺も藤緒も一人っ子だからな」

「うん。ちよつと姉妹とか兄弟に憧れるんだよね…今度雅の家にお邪魔しようかなー」

「いいな、それ」

「いや、いいけど。うちのご馳走、二人の家みたいに美味三昧じゃないと思うから、期待しないでよね」

嬉しいから、いつでも遊びに来てほしいけど、と私が言うと、二人がやったとハイタッチする。

「俺、ロールキャベツが食べたい！肉たっぷりなの！！！」

「あ、いいなあ、ロールキャベツ。私、クリームシチュー！！とろとろで野菜ごろごろの！」

リクエストがすごい庶民くさい。それとも気を使ってくれてるのか。

気を使ってくれてるなら申し訳ないから、うんと大きいの作ろう。

「わかった、うんとたくさん作るから、いっぱい食べてよね？口に合うといいけど」

「へーき、へーき」

「やった！」

なんか、二人ってうちの兄弟みたい…。

賽は投げられた 09

本日は私が魚釣りですが、岸でしゃがみこんで頼杖をついた藤緒が一言。

「……雅、熊みたいだよ、今の君」

ええ、私は水の中に腕を突っ込んで、魚を手で掬ったと同時にぺいっと岸にいる藤緒の方に放り投げる「熊さんの魚の取り方」を実践しています。

「だって、これが一番てつとり早いんだもの。釣りなんてしたことないし、ミミズとかもないでしょ。この辺りでは」

魚の餌は流石に配給品にはなかった…当たり前か。

そもそも、軍事訓練の割には食料も置かれていて、甘やかされていと思うの。

本当のサバイバルは自給自足なんだから。

でも…初心者には無理かなあ、蛇取ったり、魚釣ったりは。

「魚捕ることになるんだったら、銚持ってたほうがいいんだけど、魚の血で川が汚れると、下流にいる人に迷惑だしね」

その危険性がないなら、木の枝削って銚作るのになー。

「雅一人いれば、有事にはお得だね」

「よくはわかんないけど、花冠伴って都落ちすることを想定したプログラムなんだって。お姫様とか若様に生活能力求めるのって時間

の無駄の極みだから、自分たちで人も養えるくらいの技術身につけなさいって」

「……ひ、ひどい……」

よしっ、五匹目ゲット！

「えー、でもだよ。私、あまり知らないけど、花冠ってうふふ、おほほで社交とか領地の統治してるから、そんな人たちにサバイバル訓練までしろってのは酷じゃない？適性とかもあると思うし」

「……うふふ、おほほ……雅、すごいよ。確かにそうだけど、君のセンス」

六匹目みつけ！

「あ、ごめん。気に障った？」

「まさか。庶民が花冠をどう見てるのかよく判った。面白いから全然オツケー」

よし、これで三人で二つずつ、と振り向くと、藤緒が拾った魚を括っている。

私も水しぶきを立てて川から上がると、近くで見えていたらしい軍人さんがぺこっ、と頭を下げた。

つられて下げると、彼（彼女？）が去っていく。

「えーと？あれは？」

「軍人の巡回だよ。参加者に何かあったときのために、常にこのあたりには数人の軍人が巡回することになってるんだ」

わからないことは質問すると教えてくれるし、初めての人のためには火を起こすのかも手伝ってくれるよ、と藤緒が教えてくれる。

「……なるほど。至れり尽くせりだねえ。あ！」

「…蛇の上手な食べ方はさすがに知らないと思うよ、雅」

ええーっ、どうして?!

じと目になった藤緒に、私が不満そうな顔を向ける。

「未だかつて、そこまで窮地に陥った軍はないから！」

「ええー。そうなの？仕方ない、今度の紅花流の訓練の時は、もつとじっくり話聞こう。期待してたのにー。がっかり」

「君だけだから！そういうことでがっかりするの！」

普通は、火を起こして食料見つけるだけでも精一杯なのっ、と思いきり突っ込まれて、目から鱗。

「…ひよっとして、紅花流って、軍よりいつちゃってる？」

「うん、君の話聞かぎりでは」

「さっ、次行こう！」

いかん、形勢不利だ。こうなったら三十六計逃げるにしかず！

しかし普通じゃなかったんだ、うちの道場。

ちよっただけ認識変わったよ。まったく後悔とかはしていないけ
じ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8012z/>

花鳥風月～花よりも華～

2011年12月28日08時45分発行